
P-MAX

暗影恐夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P-MAX

【Z-コード】

Z0868D

【作者名】

暗影恐夜

【あらすじ】

超能力の研究を行つてきたセフィロト機関。そのセフィロト機関により体の隅々までを弄られ、陵辱された主人公、十六夜祐は自らをリタリエイター（復讐者）と名乗り、セフィロト機関への復讐を誓つ。

夕日に染まる教室。そこにいるのは一人の少年だった。

片や黒い髪をざんばらに伸ばした少年、もつ片方は眼鏡をかけた知性的な雰囲気を漂わせる少年。一人ともこゝ、高麗学園2年B組の生徒である。

「去年の 今田だつた」

黒い髪を伸ばした少年が小さく呟いた。その目は窓の外に向けられており、そこに浮かぶ感情を知るのは難しい。

「姉さんが消えた。警察はろくに調査もせずに行方不明とだけ決め付けて、こゝの件はもう忘れられた」

「抑揚無く、淡々と続けていく。

「今年も起きるかもしれない、と?」

眼鏡の少年が言葉を遮る。

「ロマンチストだな、どこの七不思議かねそれは」

「こゝの学園が何か隠しているのは事実だ、現に姉さんの時だつて

「君も都合よく巻き込まれるとは限らないだろ?」

「ツ!」「

ギリ、と歯軋りの音が聞こえる。

「ま、それしかないのならそれに懸けるというものがね」

「お前は何でいるんだよ、こゝにいる理由がないだろ?」

「お前を一人にすると何をしでかすかわからなくてね、別に不味いことはないだろ?」

「勝手にしろよ」

ざんばらに伸ばした髪をくしゃつと搔き、少年が教室から出る。

(つたぐ、保護者、ふりやがつて)

心中で愚痴をこぼしていると、耳に何やら声が入ってくる。

『……対象者は……去年度よりも質の高い素質、……超P.S.I.発生シ

ステム……』

どうやら成人男性の声のようである。人数は一人程度といふところか、学校の教室か何かだろうか。

声は先ほどまでいた教室の隣の教室から聞こえてくるようである。

「おい、綾媛　」

「分かつていい、隣の部屋の声だらう?」

「ツ！　」

声は少年の背後からした。何時の間にか眼鏡の少年　綾媛が背後に立っていたのである。

「気配を消すような真似は止めろよ……」

「俺はそんなつもりはないのだがな」

「余計性質が悪いな」

少年は吐き捨てるように言つと、扉の隙間から隣の教室内の様子をのぞいた。中にいるのは白衣のようなものを着た大人の男が三人。その肩には従の円が規則的に並べられた紋様　セフイロトの樹が描かれたワッペンがつけられている。

「セフイロト機関か?」

セフイロト機関。その強さの強弱に関わらず人間が潜在的に持つ超能力を利用した商品を製造、販売している会社である。その規模は大きく世界中に支社を持つており、もちろん日本にも幾つか支社がある。

「そんな大きな会社が何で……」

綾媛が呟く。刹那　。

「誰だ?」

男の一人がこちらを向き、問い合わせてくる。少年たちが逃げ出そうとしたときにはもう遅く、扉が開けられる。

「ん、君達は　2年B組の十六夜祐君と綾媛幹也君だね。ふむ、少し話がある、時間をいただけないかね?」

思えばこれがすべての始まりだったのだ。

そう、あの地獄のような日々の……

序（後書き）

ん、何々、ギアライザーじゃないのかって？ そのとおりです、違います。

ギアライザーの方については保留中です、多分完結はさせますんでまあ、気長に待っていてください。多分ですが。

今回はギアライザーと違つてかなりのシリアスになる予定です。それはもうマジで。

なので暗い話が嫌な方は読まないほうがいいと思います。きっと鬱になるんで。

まあ、このプロローグを読んで少しでも惹かれたら読んでくれると幸いです。
ではこれにてノシ

act1：復讐宣言

東京。いつの時代になつてもここは日本の中で多くの技術が集中し、活気があふれている。

高層ビルに設置された大型モニターの中では女性アナウンサーが今日のニュースを述べていた。田舎で起きた殺人事件のことを伝えたあと、画面にテロップが入り、別の話題に切り替わる。

『次は現在日本でテロ活動を行つてゐる武装勢力クリフォートについて、セフィロト機関が開いた記者会見の映像です』

すっかり悪役だな。

男は心中でつぶやいた。黒いサングラスで目元を隠し、黒いロングコートを身にまとう。ざんばらに伸ばしていた髪はぱっさり切った。未練や何もかもと共に。

記者会見には自衛隊が武装勢力に対し攻撃を行うこと、それに対しセフィロト機関が物資援助を行うことなどが発表されていた。だが、きっとそんなものは隠れ蓑に過ぎないだろう。何から何まですべてをセフィロトが行うはずだ。それを正当化するためにそんなことをほざいているのだろう。

記者会見の映像が終わり、別のニュースになると男は興味を失つたように再び歩き出した。

轟つ！

大気を震わせ、一体の巨大な鋼がビルの隙間を舞つた。大きさは8メートル程度、全身を薄いグレーに塗装されたその機動兵器はビルの合間で滞空するとくるりと背後に向き直つた。ヴァン、と双眸が翠に煌く。セフィロトの第一世代と呼ばれるPBM、PBM-05 Aホーンアウルである。

それに続き、数体のPBMがビルの合間を舞う。青い単眼モノアイが特徴的なPBM、レイヴンである。レイヴンは手にしたレーザーライフルをホーンアウルに向けるとその引き金を引く。

バシュン、と重厚が唸りとともに光弾を打ち出す。ホーンアウルはブーストを吹かすと、ぐるんと横方向に回転し、機体を射線上からそらす。そのままブーストの推進力を利用し先頭のレイヴンに肉迫、ビームライフルの弾をレイヴンの胸部 ちょうどビック・クラッシュ・ピットのある位置 へと放つ。光弾は胸部に大穴を穿ち、機体が爆散する。

「ちつ、これだけ数がいるとやつかいだな」

ホーンアウルの「ツク・ピット内、レーダーに映る多くの所属不明の熱源反応を睨みつつ綾媛は呟いた。レーザーライフルの残弾数は20発、対して敵機の数は十体弱というところだ。一体につき一発が限度というところか。

ホーンアウルのブースターが火を噴き、機体が舞い上がる。上空からレーザーライフルを立て続けに三発撃つ。光弾は一体のレイヴンに穴を穿つ。爆散。レイヴンたちが散開する。

「くそつ、ばらけられたか」

忌々しそうに綾媛が吐き捨てる。刹那。

「安心しろ、俺が来たらもう安心だあつ！」

レイヴンの一体が道路に叩きつけられる。そして、その上に立っているのは青いPBMだった。背部からは翼のような大型スラスターが伸び、両手には高電圧発生装置のついたナックルガバー。その单眼はホーンアウルをじつと見つめていた。まるでアイコンタクトでもするかのようだ。

「大滝ガイ、ゲームクック参上つ！」

無線越しに暑苦しい声が響いてくる。セフイロトの研究所で知り合い、今では背を預ける仲間となつた男である。

「行くぞつ、悪のセフイロト機関！」

スラスターが火を噴き、PBMゲームクックがビルの合間を駆け

る。そしてレイヴンの一体に肉迫し、紫電を帯びた拳を叩きつける。一瞬、びくりと機体が硬直し、がくりと崩れ落ちる。高電圧により、内部メカがショートしたのだ。

「綾媛つ！一機そつちにむかつた！」

「了解だ」

上昇する一機のレイヴンをレーザーライフルで打ち抜く。爆発し、破片を撒き散らす。周囲の民間人は避難しているようなので被害は出ないだろう。

「これで最後だあつ！」

下方でガイの声が響く。見ると、ゲームクックの拳が最後の一機を貫いていた。爆散。次の瞬間。

「見つけたぜえつ！」

ゲームクック前方に突如熱源が現れる。ゲームクックがブースターを吹かし、後ろに飛びのく。刹那、先ほどまでゲームクックがいた虚空を赤い光刃が薙ぐ。

「ふははつ、今日が年貢の納め時だつ！」

赤い光刃の主、突如として虚空に現れたPBM。両腕に設置されたブレード発生装置、両肩に設置されたリニアカノン。セフィロトの量産型PBMの中でも高性能な機体、ウツドペッカーである。

「くつ、懾か……」

ガイが呟く。高麗学園から拉致されたPSI能力者の一人であり、反乱軍討伐部隊の隊長である。

「はつはあ、ここで貴様らを切り刻めば晴れて俺も九未知会の仲間入りだあ」

両腕から光刃を生み出し、ゲームクックに肉迫する。一撃目は右から。ゲームクックは振るわれる左腕をくぐり、懷にもぐりこむ。が、ウツドペッカーは急上昇しそれを避ける。

しかしその次の瞬間、ウツドペッカーの背部で光が迸つた。そして機体が地面に叩きつけられる。

「だつ、誰だあつ！」

懾が吼える。そしてビル街の上空が歪み、漆黒のPBMが顯れる。夜闇を切り抜いたかのような黒き装甲、鋭角で構成されたスラリとした肢体。全身のランプは毒々しい赤を放つていて。漆黒のPBM、怨靈。その鋭い双眸がウツドペッカーを睨む。

「懾、ケテルに伝える。今ここで俺が貴様らに復讐を宣言する」それは冷淡で、抑揚のない声だった。感情の籠らない憎悪を孕んだ言の葉。

「きつ、貴様誰だっ！」

「復讐鬼、それが俺の名だ」

レムレースが両腕から真紅の光刃を出し、ウツドペッカーに肉迫する。赤刃一閃。ウツドペッカーの両腕部が「ご」とりと地面に落ちた。

「くつ、くそう」

懾は吐き捨てるど、機体」とテレポーテーションで消え去った。レムレースはウツドペッカーが撤退するのを確認すると、ブースターを吹かし去りうとする。

「待て、お前は俺たちの敵か？」

綾媛の問いかけにレムレースが止まる。そして。

「お前たちがセフィロトを憎む限り、敵になることはないだろ？」

そう、言い残しレムレースの姿は虛空に消えた。

「リタリエイター……復讐鬼か」

綾媛の呴きは虛空に霧散した。

act1：復讐宣言（後書き）

お待たせしました第一話です。

前回からだいぶ間が空きましたが楽しみに待っていた皆さん申し訳ありません。

次回はもっと早いと思こます、うん。

誤字脱字訂正、要望等あればご連絡ください。

ではノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0868d/>

P-MAX

2010年10月30日10時06分発行